
千年鎮魂歌

もなか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千年鎮魂歌

【Nコード】

N2067J

【作者名】

もなか

【あらすじ】

家を引越したその日から物語は始まる。頭から声が聞こえてきたり、変な事件に巻き込まれたり……もう、たくさんだ。

前の生活に戻してくれと願うけど、そうもいかないようだ——…
…はあ。

俺の家は亭主闕白

まただ。

母さんから話を切り出された時、漠然とそう思った。

小学校を卒業と同時に今まで慣れ親しんでいた土地を離れ、親の仕事の都合により、またもや見知らぬ土地へと転校。

俺の家庭では引越しはすでに、日常茶飯事となりつつある。

もちろん理由は父さんの職業のせいだ。

本人も「そうだ、俺のせいだ」と開き直ってはいるが、自覚はあるらしい。

しかし、俺の父さんは職業の事については全くといっていいほど語らない。

理由は知らないが、いつもはぐらかすのだ。

しかも頑固だからなおさら性質^{タチ}が悪い。

頑なに口をわりやしない。

そんな馬鹿みたいに頑固な親父に俺含む一家はいつも振り回される。

今回も例外なく、そうだった。

コンコン。

不意に、俺から見て左手にある車窓から音が鳴った。
今まで閉じていた目を開けると同時にドアが開かれる。

「寝てたのか、キヨ」

開かれたドアの上に肘をついた体勢のまま、少し屈んで顔を出したのは、俺と同じ顔のそいつ。

ちなみに「キヨ」は俺の愛称であり、本名は野村清介^{のむらきよすけ}である。

「寝てない。それより着いた？」

体をずらして外に足を出せば、そいつはあっさり引いてくれる。
そして、そいつは俺の問いににっこり微笑んで頷いた。

「今度は一軒家。先に見たがなかなか良い家だった」

「どうせまた引っ越すんだからどの家も一緒だろ」

俺が返した言葉にそいつは「まーな」と肩を竦めてみせた。

そいつ……という言い方はやめよう。

仮にも兄弟であり、しかも俺の双子の兄なんだから。

彼の名前は野村真介^{のむらしんすけ}。愛称はシン。

名字はもちろん一緒であり、顔も身長も体重も声も一緒である。
ようするに、俺達二人は一卵性双生児。

唯一変えられるヘアスタイルも、俺達は変えない。
理由はなく、ただたんに趣味が一致するのでそうなった。

車を出た瞬間、今までずっと車内に居たせいか自然と伸びをしていた。

そんな俺の肩にぐると腕を回して欠伸あくびをするシンを横目に溜め息を吐く。

俺の兄は基本、甘えたのめんどくさがり屋である。

「シン、荷物は？」

「母さんが運んだ」

どうしようもない兄。

母さんはシンを甘やかし過ぎだ。

おかげで知り合う人達には俺が兄のようだ、と言われるようになった。

まあ、それはどうでもいいのだが。

「ちょっとキヨーー！ 家の片付け手伝ってくれなーい！？」

これが一番厄介。

面倒事は全て俺に押し付けられる。

「シン、さっきまで何してたわけ？」

「ちよっと考え事を」

「嘘つけ」

「ばれた？」と屈託無く笑うシンにもう何も言う事はない。

迷わず裏拳を兄の顔に見舞えば、パシィッ！と良い音を出して止められた。

止められた拳を見て、それからシンの顔を覗けば未だ屈託無く笑っ

ていやがる。

「まだまだだな」

「いいから離せ、馬鹿兄」

そう言えばぱっと手を離して、今度は俺の首に両腕を絡めてくる。
もう……色々とめんどくさい。

「ちょっとー！！ キョーー！！？」

……本当に、めんどくさい。

小さく溜め息を吐いて引っ付く兄を引き剥がす。
俺はそのまま足早に、家を目指した。

『見つけた』

——そんな声を自然と聞き流して。

役立たずでマイペースな兄

間近で見た家は、シンが言った通りなかなか綺麗だった。

父さんからは中古の一軒家と聞いていたが、新築にも劣らないと思う。

全体的に黄土色をしていて、縦長の並行四辺形にもう一回り小さい同じものがくつついた様な形。屋根は黒で平行。

土地はそれにしては少し窮屈に見えるが、カースペースが一つあって、その奥に倉庫もあるんだから十分だと思う。

玄関の前に小さな段差が二つ。

それを上れば扉は開ける間でもなく、全開になっていた。

そこに積み上げられたダンボールを業者の人が運び、それを指示する母さん。

こう見ればしっかりした人に見えるのに……残念ながら母さんはしっかりなどしていない。

むしろその逆。

かなりのおっちょこちよいである。

その証拠に……今、ドアの角で足をぶつけた。

痛かったのか、その場でうずくまる母さんを、重そうなダンボールを持った業者の人が心配そうに声を掛ける。

普通、逆だろ。

そんな母さんに半ば呆れつつ、後ろから伸びてきた手を払った。

「え。後ろに目でもついてんのか」

「行動がワンパターンなんだよ」

少し驚いたようなシンの声を聞き流して、母さんに近づく。
母さんは俺の足音に気づいたのか、不意に顔を上げた。
……その目に涙が溜まっていたから、余程痛かったんだろうな。

「大丈夫？ 母さん」

とりあえず声を掛けてあげれば、母さんが「しくしく」と声を出して顔を両手で覆う。

いやいや、しくしくて。自分で言ってるし。
父さんはこれで騙されるが、俺は甘くない。

「嘘泣きすな」

「よーしよしよし」

突然スツと俺の後ろから出てきて母さんの頭を撫でるシンを冷めた目で見える俺。

もちろん芝居だろうが、だんだんヒートアップしてきた二人は仕舞いには俺を睨みつける。
意味が、わからない。

「何で睨まれてるわけ、俺は」

「キヨがすぐに来てくれてたら、こうはならなかったのよ」

「そうそう」

「いや、シンが——」「言い訳なんか聞きたくないわ」

「そうそう」

おかしい。

なぜ今俺は、責められているのだ。
てかシンは相槌しか打ってないし、そもそもの原因はコイツだ。

「おい、馬鹿兄」

「母さん、キヨが俺を馬鹿って呼ぶー」

今度はシンが、しくしくと嘔泣きする番。

完全に不利だ。

これはどう転んでも俺の立場が悪化するだけだ。

気づけば俺達の周りにはダンボールを持った業者の人がいる。

批難やら呆れやら同情を浮かべたさまざまな視線を受けながら、俺は人生初、ダンボールに包囲された。

そして一刻も早くこの状況から逃げ出すため、母さんに声を掛けていた重そうなダンボールを持った業者の人から順番に指示を出し始めたのだった。

「キヨは扱い易くて助かる」

ふうとたいして何もやってないくせに疲れたように息を吐くシンに腹が立つ。

コイツは本当に何もしなかった。

普段もそうだが、コロコロ暇そうにリビングで転がるその姿を何回

見たか。

しまいにはコンビニにでも行ったのか、ポテチを抱えて食べるシンはさながらおっさんのようだった。

「黙れ役立たず」

「キヨは見てなかっただろうけど、俺も忙しかった」

素晴らしい嘘を吐いて今度はどこから出したのか、板チョコを食べている。

その姿を見て俺は続く言葉を失った。

俺の兄はもうダメだ。

神経系による病気で、きっと動く事が出来ないんだ。

俺は強引にそう思う事で緩む涙腺を何とか引き締める事が出来た。だが、油断してシンの目と合ってしまった。

「何でそんな哀れんだ目で俺を見てんだ？」

「俺は自分の兄が不憫に思えてしょうがないんだ」

そんな俺の言葉を聞いて嬉しそうに頬を緩めるシンに絶望感を味わう。

コイツは何一つ意味を理解しちゃいない。

それは医師に余命数ヶ月と宣告されたような気分だった。

「安心しろ。お前の兄は常にスリムボディを保つ事が出来るんだ」

「頼むから小学生からやり直してくれ」

いつその事、生まれる前からやり直してくれ。

そうしたら俺はきっと苦労せずに生まれたのだ。

そんな俺の心中も露知らず、再び板チョコを食べ始めたシンを見てどっと疲れた。

さっきのシンの詳細について、一つ付け加えよう。

キング オブ マイペース

俺の兄はその頂点に君臨していた。

役立たずでマイペースな兄（後書き）

引越したその日に 1

時刻は夜の8時。

秋ともなれば、すっかり暗くなるわけで。
しかも冬の兆候か、けっこう寒い。

「さぶっ……」

思わずぶるりと身震いして腕を擦る。

家を出る時にジャンパーを着てきたのだが、それも少し足りなかったようだ。

マフラーも着けてこればよかった、と今になって少し後悔する。

というより。

どうして俺がこんな寒い中、家を出てコンビニに行かねばならんだ。

そんな思いがふと湧き上がれば沸々と不満が湧き起こる。

その原因はもちろん、家族のせいであつた。

そういえば一度、こんな話を聞いた事がある。

誰が言っていたかは思い出せないが、内容だけは覚えている。

「こんな家に生まれたくなかった」と大半の子供が親との喧嘩の時に使うが、実は子供はちゃんと親を選んで生まれてきているとか。
むしろ親が子を選べない。

……ああ、最悪。

何でこんな話を思い出したんだ。

俺は心底げんなりする。

だってそれは……

俺は人生最大のミスを、生まれる前から犯していたという事じゃないか。

グチグチと文句を垂れていたら、ようやくお目当てのコンビニが見えてきた。

俺はそこで何故こうなったかの経緯を、自動ドアをくぐると同時に思い出してしまう。

最悪。

俺はもう一度、心中で同じ言葉を吐き捨てた。

——それはおよそ15分ぐらい前の事である。

「キヨ、アイス買ってこい」

昼は仕事の打ち合わせの為、顔を出せなかった父さんが新しい我が家に帰ってきての第一声。

父さんらしいといえばそうだが、この時ばかりは呆れた。

てか、アイスで。
子供か。

「普通、他に言うことない？」

「ん？ ……ああ、そうだな。ただいま」

違うし。俺はそんな言葉を求めちゃいない。

例えば家が綺麗になったとか、誰が片付けたんだとか、シンを甘やかし過ぎだとか。

あ、最後のは違うか。……いや、あながち間違っちゃいない。

まあ、とにかく。

他に言うことはないのか、この馬鹿親父は。

「あ、キヨ出かけんのか？ じゃあついでにポツキーよろしく」

「はあ？ ちが——「あつらく！ あなた！ いつから帰ってたの？」」

どん！

横から乱入者。その際に右肩を強打。さらにその衝撃で壁に当たり、左肩も負傷。

そのままずると壁に寄り添ってしゃがむ。

俺の精神は不安定、ストレスは満タン。

今すぐ病院に行く必要があるかもしれない。

……むしろ行かせてくれ、頼むから。

俺は何とか気力を振り絞って立ち上がる。

ふらふらと階段を上ってなんとか自室に辿り着く。

そのままジャンバーを引っ掴んで玄関に向かえば、俺に気づいた母

さんが「あら」と声を上げた。

「出かけるの？」

「ああ。俺は従順な子供なんでねっ!!」

我ながら情けない捨て台詞と共に思いっきり玄関を閉めた。

「ありがとうございますー」

やる気の無さそうな店員の声を聞いてコンビニを出る。

俺は購入したアイスが数本入ったビニール袋を右手で持って、重い足取りで家の帰路を歩く。

正直、俺のこの扱いは引越しと同じように日常茶飯事。奴らは俺をパシリか何かかと勘違いしてるのだろうか。

俺の中のネガティブ思考がスイッチを押しそうな気がして慌てて取り消す。

あぶない、あぶない。

俺は一度ネガティブ思考に陥るとどうしようも無くなってしまう。

(らしい)

それはシンに素で殴られるぐらい。

……あれはなかなか効いた。

ふと視線を辺りに向けると唯一の灯りである街灯の下に背広を着た

男の人が立っていた。

微動だにせず、目を閉じている男を俺は不気味に思いながら通り過ぎる。

……あれ。何だ、今の。

通り過ぎた瞬間、俺は小さな引っ掛かりを胸に覚えて男の姿を盗み見るようにちろりと視線を戻す。

上から順番に視線を落として……——カチリ、と頭の中でピースが合わさる音がした。

気づいてしまった。そいつの奇怪な現象に。

——その影がないことに。

「ひっ……！」

小さく悲鳴を上げて、後ずさる。

思考がパニックに陥る。

逃げろ、逃げろ……！！！！

脳の中で本能による警報が鳴り響く。

そんな中、そいつだけはそこに悠然と立っていた。

さっきまでそれを見ても何ともなかったのに、今見たらそれがさつきと違って見えた。

すると突然、微動だにしなかったそれに変化が訪れた。

ゆらゆらと不規則に揺れ始めたそれは更に不気味で、より一層恐怖心を増大させる。

俺の膝が、ガクガクと震え始める。

何だよ、これ……

呆然としてしまう。

これは本当に現実で起きている事なのか？

……いや、絶対夢だ。

試しに頬を抓るが、痛い。

右手に持ったビニール袋の重みも現実的だ。

半ば現実逃避をしている俺を他所に物事は進行してしまう。

ついに、その瞳が——……開眼した。

虚空を彷徨うその焦点は、まるで合っていない。

俺はその現象に目を離すことが出来ずにいた。

次第にそれは輪郭を帯びて、俺の目とかち合った。
その目の焦点はちゃんと合っている。

そして……——真赤に染まる。

口元は三日月のように、にいつと口角が上がる。

——まるで、子供が欲しい玩具を見つけたように。

「うわああああっ！！！」

気づけばそれに背を向けて、走り出していた。

気だけが急いで足が絡まる。呼吸がおかしい、背筋が寒い。

冷たい汗が、頬をつたう。

お決まりというか、何というか……

俺は足が絡まってその場に転倒。

咄嗟に両手をついて顔面の怪我は回避したものの、その代償に両手の皮は擦り向け、右膝も打撲。

俺が何したっていうんだよ……

ふと右手にビニール袋がない事から、俺は焦って後ろを振り向く。

——それがいけなかった。

転んだ俺の真後ろに、さっきと同じ顔をしたそれがいた。

「あ、あ……」

どうしてここにいるんだ。

その足音は聞こえなかったのに。

じんじんと痛む手の平を動かしながら、じりじりと後ずさる。

それが無駄とわかっていても。

誰かがこの瞬間に俺を助けてくれればいいのに、なんて考えたりして。

そして、その手が俺に向かってきた。

——もう駄目だ。

俺は目を瞑って受け入れる覚悟をした。

走馬灯のように馬鹿みたいな思い出が駆け巡る。

前の学校の事、友人のこと、両親のこと、役立たずな兄……

あ、ポッキー買い忘れた。

ふいに思い出して俺の口元が緩む。その頬に涙が伝った。

『いやあ、僕って運が良いよねえ……』

——不意に頭の中で場違いなのんきな声が聞こえた。

引越したその日に 2

「は？」

自分でも驚くぐらい、素っ頓狂な声。

場違いな声が聞こえたせいで、俺の目はぱっちり開いてしまった。そして、すれっすれの至近距離にある手を見てぎよっとする。

「……ッ!!」

一瞬、息を吞むがそのまま左に横転。

……何か知らんが、回避してしまった。

その事に安堵している自分に気がついて、俺は微苦笑を漏らす。覚悟はどうした、俺。

『おおー、やるじゃんか』

ああ、そうだろう。

俺もまさかあの状況を回避できるとは……

「……はあ?!」

『何驚いてんの。あ、まさか僕のせい?』

まただ。……ありえない。

軽快な笑い声が頭の中で響く。

一体全体、今日はどうなっているんだ。

気味の悪い奴はいるわ、頭の中で声が聞こえるわ……さっぱりだ。

『油断は禁物！』

再び聞こえたのん気な声と共に、横で何かが動く気配がした。

慌てて逃げようとしたが、時すでに遅し。

がしりと乱暴に頭を掴まれて、そのまま地面に叩きつけられていた。

ぐらりと脳が揺れるような感覚と、激痛。

その痛みに呻くような声を漏らす。

未だ俺の頭を掴むその顔を、揺れる焦点でぼんやり見ながら俺は頭の下に生温かい物を感じた。

――血だ。

それを認識した瞬間、俺の中で何かが爆発した。

「あああああああああ！！！」

意味のわからない衝動。

激しいなんて表現だけじゃ言い表せないぐらい俺の中で暴れまわる。身悶えようにもそれが俺の頭を固定しているせいで、動けない。

代わりに自由な手足が暴れまわる。

すると、今まで掴んでいた手があっさり離れた。

だけど、今の俺にはそんなもの関係ない。

この衝動をどうにかしたくて、堪らない。

吐き出そうにも吐き出せない焦れったさに狂いそうだ。

『それを受け入れて』

不意に頭の中で、またあの声が聞こえた。
ぐるぐる頭の中で反響する声。

何を、どうやって。

その間にも、俺は暴れる。

地面にきつく爪を立ててガリガリと引っ掻いたり、体を丸めて服を
顎が痛くなるくらい口で噛む。

普通の人が見たら、俺の姿は異常にしか見えないだろう。

『それを外に出そうとしないで、内側から受け止めるんだ』

突然現れた解決法。

俺はそれに縋りつくように実行に移そうとするが、その表現があま
りにも抽象的で残念ながら、わからない。

『ゆっくりと、落ち着いて。平常心を取り戻すんだ』

落ち着けるわけがない。

さっきまでの激痛はすっかりわからなくなったし、ガリガリと引っ
掻く爪も今となってはない。地面に落ちて、指からは血が出ている。

しかし正体不明のそいつがその言葉を言った瞬間、不思議と中が和
らいだ気がした。

それに安心したのも束の間、再び溢れ出しそうになる何かに慌てて
息を殺して抑えようと努力する。

服を噛んでいた口を戻して、未だ引っ掻き続ける指を止めて、平静
に戻ろうと努力する。

俺の心を取り戻そうと、努力する。

『なかなか理解が早いね』

どこか感心するような声を頭の隅に追いやって、集中する。

落ち着け、戻れ。

何回も繰り返し、心の中で自分に言い聞かせる。

さっきよりも自分が冷静になったのはわかるが、いつまた暴れだすかわからない何かに俺の緊張の糸は切れない。頬に汗がつたう。

その時ふと、頭から流れる血について思い出した。

「くうう……ッ！」

治まってきていたはずの何かが再び暴れ始める。

切れ切れの理性が飛びそうになる。

『血のことはあまり思い出さないで。落ち着いて、もう一度』

すっかりお馴染みの俺の頭の中の声もどこか切羽詰まっている。

俺はその言葉に素直に従おうとするも、今にも飛びそうな意識と疲労で流されそうだ。

それでも馬鹿正直に流されるわけにもいかず、踏ん張る。

根気良く、ゆっくりと抑えこもうとする。

それに合わせて深呼吸も、なるべくリズム良く繰り返してみる。

『1、2、3……1、2、3……』

それに気づいたらしく、俺の中にいる正体不明の奴が拍子をとってくれる。

俺はそれに合わせて深呼吸をとりながら、何かが落ち着いていくのがわかる。

『少し我慢してね』

不意にそんな言葉に変わって俺が疑問を口にする前に、圧倒的な質量が俺の中に飛び込んできた。

一瞬、息が詰まったのと同時に何かが薄れゆくを感じる。

『お疲れ様』

どこか嬉しそうなその声を頭の隅で聞いて、俺は意識を手放した。

——化け物のことなんかすっかり忘れて。

始めの一步

ピッ、ピッ……

ぼんやりと意識を取り戻したとき、最初に聞こえたのはどこかで聞いたことがある、機械的な電子音だった。

続いてゆつくりと目を開けて、視界に入ったのは真っ白なもの。

それが天井だと気づくのと、自分がベットのの上にいることを認識するのに少し時間がかかった。

「ここは……？」

ゆつくりと起き上がって無意識に眩く。

きよろきよろと辺りを見回せば、ここが病院だというのは誰の目から見ても明白だった。

そして、思い出す。

あの化け物のことを。

瞬間、自分の体から血の気が引いたのがわかった。
背筋に冷たいものが走る。

逃げないと。

それだけが頭を支配する。

気づけば布団を蹴飛ばして、腕に繋がっている点滴を乱暴に引き抜いて、部屋のドアに手を掛けていた。

——ガラッ。

俺はドアを開けていない。

勝手にドアが開いたのだ。

一瞬の緊張のあと、ひょっこり顔を出したのは母さんだった。

俺を見て目を丸くする母さんに、俺も同様に驚いていた。

「母さん、なんで……」

なんでここにいるんだ。

続く言葉を言う前に、母さんに遮られた。

ぎゅっと、俺より小柄な母さんが抱きついてきたからだ。

え、なんで？

混乱する俺をよそに母さんは涙目で見上げてくる。

父さんはこれにやられたのかな、と思った。

「どこも痛くない？ 大丈夫？」

これは夢なのか。

そう思うぐらい母さんが珍しく俺を本気で心配していると、声を聞いてわかった。

そして俺の体を探るように触る母さんは少しこしょばい。

正直やめてほしいと思うけど、俺の腕を見てさつと顔色を変えた母さん。

不思議に思っただけで視線の先を辿れば、さっき乱暴に引き抜いたから少量の血が腕から溢れ出している。

「ナ、ナースコール……!!」

「待てい！」

半泣きでコールを押そうとベッドに近寄る母さんを、腕を掴んで慌てて止める。

俺は極めて健康だ。

いつもなら「唾でもつけときなさい」とかいう母さんなのに、今日はどうもおかしい。

「どうしたんだよ。母さんらしくない」

「それはこっちのセリフよ！ 電話が来たと思えば病院からで、キヨが血を流して路上に倒れてたとか言われて……」

ちょっと待て。

ぐずぐず鼻を吸る母さんには悪いが、思考が追いつかない。

つまり、整理すると。

意識を失った俺はあの後、病院に搬送された……？
何事もなく？ 本当に？

「何か異常とかは……」

「軽い貧血を起こしてるだけだって」

ふと頭に手を当てれば、包帯が取り付けられている。

あの時か……

不意に思い出した出来事に、気分が悪くなる。

本当に、俺の体に何も異常はなかったのか。

あのまま意識を失った俺はどこからどう見ても、無防備だったはずだ。

それをわざわざ見逃すようなマネをするか？ 普通。

アレは俺を狙っていて……待て。

そもそもあの時、何で俺は狙われたんだ？

そういえば不可解な点はいくつもある。

あそこは住宅街で、少なくとも俺が大声を出せば気づくはずの異変を、誰も気づかなかった。

もし家に誰もいなかったとしても、普段からあそこまで人氣が少ないものだろうか。

車一つ、人一人も通らなかった。

ぶるりと、改めて身震いする。

よく生きてたな、俺。

「大丈夫？」

「あ、うん」

俺の顔を心配そうに覗き込んでくる母さんに、慌てて笑みを浮かべる。

やっぱり、母さんらしくない。

こんなに心配されると調子が狂う。

あの時だって、パシリにしたくせに……っというか。

「今日って何日？」

「11月2日。とりあえず目も覚めたんだし、先生呼びに行ってくるわね」

昨日は11月1日。

まさか引越したその日に事故(?)するとは思わなかったけど。

俺が幾分か元気があるのを見てほっとしたのか、慌てて部屋を出て行った母さんを見送ってベットに腰掛ける。

母さんもいるんだし、ここは普通の病院だ。

起きた当初はどこかの研究所にでも隔離されたかと……漫画の読みすぎかな。

『気分はどう?』

「まあまあかな」

頭の中で聞こえた声にすんなり返答している自分に驚いた。

あんなことがあった後だから、どうやら警戒心が薄れてしまったらしい。

最初の驚きが嘘みたいだ。

そのことには相手の方も驚いているらしい。

一瞬の間のあと、くすくすと明るい笑い声が頭に響いた。

『君、そんなに簡単に人を信じない方がいいよ？』
「人かどうかもわかんないけど」

でも、あの時こいつに助けられた。
こいつの声がなかったら、俺はあの時諦めて、きっとここにはいなかった。

本人にその気がなかったとしても”助けられた”という事実は、俺を信用させるのには十分じゃないだろうか。
……やっぱりあまいかもしれないけど。

『君、名前は？』

「は？」

『は？ じゃない。いつまでも君じゃ、呼ぶほうも気分が悪いでしょ？』

いや、突然の質問にびっくりしただけだ。
てか、名前とか今さらのような気がするけど。
そもそもお前、人間なのか。

色々言いたいことあったけど、俺はコホンと一つ咳払いする。

まあ、一理あるか。

「野村清介」

『……だっさい名前。お母さん、ネーミングセンスないんじゃない？』

「うっせ、ほっとけ。……で、お前の名前は？」

他人から見たら俺が独り言をべらべら喋ってる異常者にしか見えな
いだろうけど。

そこでは確かに、俺とそいつにしかわからない会話は成立している。

『カイン・アシュルージュ』

洒落た名前だな。

そう思ったけど、口に出すのはやめた。

なんかムカつくから。

始めは名前から。

それは基本的なことだけど、俺は一步、踏み出した気がした。

波瀾の幕開け 1

——ガラッ。

タイミングが良いのか、悪いのか。

最初よりは幾分明るい母さんと、その後ろに黒髪をオールバックにして纏めた白衣を着た医者と思わしき人が入ってきた。

俺としてはさっさとカインにあれは何だったのかを聞いて、すっきりしたいところだったが。

俯くように溜め息吐き、頭の片隅でふと考えが過ぎった。

それにしてもカインの声は俺にしか聞こえないのだろうか。

そういうえば、マトモな人間の前で会話をしたことはない。

『あの医者、ヤクザみたいな外見してるね』

まるで心を読んだかのように絶妙なタイミングで声が聞こえた。

一瞬で俺の体が凍りつく。

おそるおそる俯いていた顔を上げれば、母さんが不思議そうな顔で首を傾げていた。

瞬間、ほっと力が抜ける。

……よかった。

多分、聞こえてない。

医者の方に目をやると、どこからか椅子を取り出してきて俺の前に座った。

真正面から見られて俺は少したじろぐ。

なるほど。

確かにそうだ。

さっきはちゃんと見てなかったからカインの言葉に反感を持ったが、確かに医者というよりヤクザのほうがシツクリくる外見をしている。その目つきの悪い切れ長の瞳に昔、柔道でもしてたのかと思うぐらいがっしりとした体型。

しかも髪をオールバックなんかしてるから、余計だ。
白衣がただのコスプレに見える。

「服を上げてくれますか」

ハッと我に返った俺は慌てて服を持ち上げる。

意外と穏やかな口調に少し驚いた。

まあ、医者だし口調まで悪かったらダメだろう。

そこに聴診器を当てられて、次に同じように背中にも当てられた。それをはらはらとした面持ちで見る母さんに笑いそうになる。

『キヨのお母さんって心配性なんだねえ……』

断じて違う。

即座に否定したが、心の声は聞こえないようだ。
もどかしい気分になる。

てか、いつの間にか俺はカインと親しい仲になったらしい。

俺もカイン、と呼び捨てにしているがカインもカインで早くも愛称で呼んでいる。

まあ、呼び捨てだろうが愛称だろうがどっちでもいいんだが。

俺の体から聴診器が離れ、耳から外して白衣のポケットに直すのを確認する。

「特に異常はありません。今日中に退院しても問題ないでしょう」

にっこりと温和な笑顔で告げてくれて、俺の中で印象が変わった。母さんが先生に丁寧にお辞儀する。

先生が笑顔のまま、そんな母さんに向き直った。

——ガラッ。

先生が口を開こうとした瞬間、突然病室の扉が開いた。

一斉にそちらに視線を向けると、黒いスーツを着た大柄な男と紺色のコートを着た小柄で丸々とした男が入ってきた。

対称的な二人は並んで軽いお辞儀をすると、小柄な男がスーツの中に手をつっ込んでゆっくりともったいぶるように何かを取り出す。

俺は取り出したものを見て、息を呑んだ。

母さんが困惑した顔で二人の男を交互に見る。

その手には警察手帳が握られていた。

俺が緊張した面持ちでゴクリと息を呑むと、あの時と同じように場

違いな声が聞こえた。

『なに、このチンドン屋みたいな二人』

俺は危うくずっこけそうになる。

「警察の方がなにか？」

気を取り直してカインの返答と共に小柄な方に声を掛ける。
これでカインの奴も警察ってわかるだろ。

『けーさつう？』

間の抜けた声。俺はずっこけた。

我慢できずっこけた。

おかげで周りの人達に怪訝そうな眼で見られたが、笑顔で何とかやり過ごして再びベットに座る。

コホン、とその際空咳をしといた。

こいつは警察も知らないのか。

知能は三歳児以下か。

俺は一種の不安を感じた。

「出来れば、医師の方には御退出お願いしたいのですが」

唐突に切り出した小男は、先生にちらりと視線を送る。

それだけで緊迫な雰囲気が変わるが悲しいことに、俺の頭の中では軽快な鼻歌が聞こえているせいで、場の空気に乗れない。

KYめ。

とっとと出て行け。

「そのご希望には承諾しかねます。事情聴取を行う際、医師の人間を一人付けることが条件だったはずでは？」

小男が大男に目配せする。

大男はコクリと頷いて、それを見て小男が大袈裟なぐらい溜め息を吐いた。

それを見て二人の上下関係がはっきりと分かる。

どうやら立场上、小柄な方が上らしい。

「わかりました。今回は、その条件を呑みましょう」

今回は、の部分を強く強調してコホンと軽く咳払いをする。

それでその人の空気が変わったことに気づくが、それと同時にカインの音調も変わったことにげんなりする。

まだ終わらないらしい。

「実は今、私達はある事件を調査しています」

「事件……？」

小さく反応した母さんが動揺した様子で聞き返す。

俺も内心動揺していたが、それ以上にカインの鼻歌にイライラしていたため顔には出なかったらしい。

小柄な方が眉を顰めているのが見えた。

まあ、事件と言われて顔色が変わらない方がおかしいか。

今さらながらに自分の失態に舌打ちしそうになる。

これも全部カインのせいだ。

俺が犯人候補にでもなったら今すぐ追い出してやる。

……追い出す？

ふと気づいた。

——カインはどこにいるんだ？

今さらながらに気づいた事実に愕然とする。

自分の頭の回転の悪さについ疑いそうになった。

頭の中で聞こえる声。

もしかしてそれは、俺の妄想で作られたものなんじゃないのか……？

未だ歌うカインの鼻歌に、俺は薄気味悪いものを感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2067j/>

千年鎮魂歌

2010年12月13日21時43分発行